

リーダーに関する調査報告

埼玉県スポーツ少年団リーダー育成委員会

これまでもスポーツ少年団では、リーダー育成の重要性が叫ばれてきた。しかし、その多くは総論で賛成であるものの、各論や実践となると盛り上がりには欠け、スポーツ少年団の恒久的課題として今日に至っている。このほど埼玉県スポーツ少年団リーダー育成委員会では、この課題解決の一助とするため、リーダーの実態をあらゆる角度から把握するため、平成11年度より3年にかけて、①主にリーダーを経験し修了した者 ②現在リーダーとして活躍している者 ③これからリーダーになろうとしている者 に対して調査分析を行ってきた。具体的には次の内容である。

- ① シニアリーダースクール修了者に対する追跡調査アンケート（平成12年度実施）
- ② 現役リーダーに対する懇談会（平成12年度実施）
- ③ ジュニアリーダースクール受講者に対する意識調査アンケート（平成11年度～13年度実施）

今回、この調査結果および分析結果をまとめたので、以下に示すことにする。

平成14年3月

※以下、調査結果を省略し、分析結果（本委員会考察部分）のみを掲載する。

シニアリーダースクール修了者に対するアンケート結果の分析

1. はじめに

これまで『シニアリーダースクール修了者や日独同時交流派遣者が、指導者としてスポーツ少年団に残る割合が少ない』という声が一般的聞かれた。そこで、埼玉県リーダー育成委員会では、その真実を明らかにし、その原因等実態を把握したうえで、今後のリーダー育成の指針とすることを目的として本県シニアリーダースクール（中央リーダースクール）修了者に対して追跡アンケート調査を行った。その結果、送付数213通のうち、住所等不明で返送された28通を除く185通中、回収されたアンケート83通（回収率44.8%）について集計を行いそれについて分析を行った。

2. 現在もスポーツ少年団に登録している者の状況について

回収された83通の回答のうち、現在もスポーツ少年団に登録（調査日現在10歳代の修了者で団員登録の者も含む）していると答えた人は、37人で44.6%にあたる。仮に調査者全体のうち回収できなかった130人全員が登録をしていないとしても、全体の17.4%にあたる人が、現在もスポーツ少年団に登録していることになる。本県ではシニアリーダースクール修了者の約5人に1人が現在でも少年団登録していることになり、これまで言われてきたイメージのわりには、比較的多くの人少年団に残っていると見える。

一方、登録者の男女比を見ると、男性26人、女性11人と男性登録者の割合が圧倒的に多く、またリーダースクール修了直後の者を除く、20歳代以上の指導者登録者については23名となり回答者全体の約32.9%、調査者全体の11.9%になる。女性指導者の問題はこれまでに言われてきた課題と一致する。また、約10名に1名の割合での指導者登録の現状を、少ないととらえるかどうかは微妙なところだが、シニアリーダースクールを修了し、現在でもこれだけの指導者が登録しているにもかかわらず、このような調査を実施するまで明らかにされなかったことは誠に残念である。コメントの中に「県大会の役員として手伝いをするにはどうしたらよいですか（20歳代女性）」など機会があれば、力を発揮したいと考えている指導者もあり、今後このような指導者の開拓に工夫が必要と考える。逆に、指導者登録はしているものの、仕事、家事、育児等におわれ活動へ積極的に参加できないでいる指導者もいる現実もうかがえた。

3. スポーツ少年団に登録していない者の状況について

スポーツ少年団に登録しなくなった理由の1位は、『進学や就職をきっかけに』で回答者全体の40.0%にあたる。次いで『時間がなくなった（25.7%）』『転居をきっかけに（8.6%）』『結婚をきっかけに（8.6%）』の順で『少年団がなくなった（4.3%）』や『魅力がなくなった（2.9%）』などの少年団側の理由よりも、個人的理由をあげた者が圧倒的に多かった。また、やめた時期はリーダースクール修了後2～3年が最も多く39.1%、次いで4～5年

の28.3%であった。この時期は、進学、就職といった生活の環境が変わる時期であると同時に、少年団では団員登録から指導者登録に切り替わる時期でもあり、現在あるシニアリーダースクール修了者に対する認定員登録のような特権を、さらに充実させることが必要と考える。

現在、登録はしていないものの、父母、OB・OG、相談役などとして関わりをもっている者が、23.9%いる。また、今後機会があれば再びスポーツ少年団と関わりをもちたいと考えているものが86.4%もいて、自分たちがリーダーとし育ってきたスポーツ少年団への愛着は、団を離れた現在も持ちつづけてくれていることがうかがえる。なかには、『自分の子どもの入団を機会に』と考えている人もいて、リーダーを経験した者が父母となり、指導者登録はしてなくても、母集団の一員としてスポーツ少年団の良き理解者として活動に参画してくれることは、今後のスポーツ少年団の発展のためには力強い存在となりうるものと思う。このような、意味からも必ずしもリーダー経験者が指導者にならなくても、父母の立場から少年団を応援していただける存在としての価値も引き出す必要性を考える時期に来ている。スポーツ少年団が創立40周年をむかえるこの時期、そのような人たちの増加が見込まれ、どのように活用すべきか考えるのもよい機会だと思う。

4. リーダー経験がどのように活かしているか

スポーツ少年団に登録している人も、登録していない人も共通していえることとして、現在の仕事で役に立っているという人が多いことに気付く。特に、職場での人間関係づくりや、上司との上下関係づくりといった内面的な部分と、仕事そのものの活動の中でという外面的な部分の両面から、リーダー時代の経験が活かされている様子がうかがえる。また、その他として『PTA活動や役員をしたときに物事をまとめるにあたりスムーズにできた』『人前で話すことが苦にならない』『集団行動でのマナーや言葉遣いなど知らないうちに身につけていた』といった日常生活の中でリーダーとしての経験が活かされていることが分かる。特に現在スポーツ少年団に登録していない人でも、84.1%の人がリーダー時代に得た経験が現在の生活の中で、何らかの形で活かされていると答えている。

10歳代後半をスポーツ少年団のリーダーとして活動した者の多くが、その経験をその後の人生に少なからず良い方向で影響を受けていることが分かる。

5. 登録指導者の悩みについて

現在、指導者として登録している人に、実際に活動する中での悩みを聞いたところ、最も多かった回答は、少子化にともなう団員数の減少であった。最悪の場合、団の存続すら危ういという例もあった。これは、スポーツ少年団が抱える問題であるとともに、日本社会全体の問題でもある。その中で、自らのリーダー経験を生かして、後輩育成に力を注ぐものの、実際の団員数が少ないためリーダーとして残る団員の数も必然的に少なく、リー

ダー育成そのものへの活気が失せつつあると答えている人がいた。また、自らがリーダー時代に学んだスポーツ少年団の理論やリーダー育成の必要性などが、他の指導者や保護者に受け入れられず、その狭間で悩む指導者の姿があった。「他の指導者や父兄はどうしても試合などの勝ち負けにしか関心がない（30歳代男性）」とその考え方の食い違いを訴える指導者もいた。さらに、若い指導者が育たないため、指導者そのものの高齢化を危惧する意見もあった。多くの時間と労力を必要とするリーダー育成よりも、目先の勝利を選ぶ傾向はスポーツがもつ特性から、これまでも挙げられてきた課題でありジレンマでもあったが、リーダー時代に学んだ理論を指導者になって実践しようとしたとき、それが実践できない環境が存在するとすれば、リーダーから指導者になった者の価値も低下する。これら環境改善のためにも、認定員等の講習会でさらに啓発していく必要性を感じる。また、指導者だけでなく保護者へも少年団の理念等説明する機会を設ける必要があると考える。このような時、先に述べたリーダー経験のある保護者のバックアップがとても重要になると思われる。

現役リーダーとの懇談会の分析

1 はじめに

このリーダーとの懇談会は、現在活動しているリーダーの代表とリーダー育成委員会のメンバーが一堂に集まり、県リーダー会活動での悩み・課題について直接話（生の声）を聞き、今後の活動に生かすことを目的として実施された。主たる話題は、「県リーダー会の会員不足」「単位団での活動と県リーダー会」「市町村本部（事務局）との連携」「リーダーから指導者へ」の4つであった。

2 「県リーダー会の会員不足」

埼玉県リーダー会は現在さまざまな課題を抱え活動をしている。その中でも最も大きな課題となっているのがこの「会員不足」である。ここ数年の会員数は40名前後（実質はもっと少ない）であり、活動・事業の多い県リーダー会では役割分担にも苦勞する現状がある。また、少人数での活動が新しい活動・自主的な活動を阻み、既存の活動の消化のみに追われている。そのため活動にゆとりがなく義務的なものになりがちで、活動していても楽しさを感じていない。

人材をいかにして発掘するか。市町村事務局に「案内」を送っても単位団まで届いていない現状がある。リーダー会活動、あるいはリーダー活動を一番知ってもらいたい単位団の指導者へのPR活動をどのように工夫していくかが問題である。この問題は、ジュニアリーダースクールへの参加市町村が固定化されている現状にも通じている。県リーダー会としてはリーダー発掘のための県内ネットワークの強化が求められる。リーダー育成委員会としても課題を認識しバックアップしていきたい。

3 「単位団活動と県リーダー会」

県リーダー会のメンバーは単位団活動がおろそかになっている現状がある。懇談会の中で出た単位団参加状況はリーダーとしてほめられるものではない。このことは各単位団の指導者からもよく聞かれる「苦情」である。過去のリーダー会においても「単位団活動を優先に」を合言葉にして活動を展開してきた。「リーダーの本来の活動の場は単位団である」という基本に立ち返る必要がある。

県リーダー会の中心となればなるほどその活動は増える。リーダー本来の姿は「単位団での活動であるべき」ではあるが現状としてやむをえないかもしれない。しかし、そのような状況であってもリーダーは最大限努力をしていく必要がある。また、『リーダーが戻れる環境づくり』は単位団指導者にも求められる。県リーダー会の中心となって活動していることを理解し、単位団への参加ができないことに理解を示しながらも「君は単位団にも欠かせないリーダーなのだ」という気持ちと言動でリーダーに接することも大切なのではないだろうか。

4 「市町村本部（事務局）との連携」

市町村リーダー（会）の活動は、そこで活動するリーダーはもちろんのこと、市町村事務局や育成担当者によって大きく左右される。リーダーにとって事務局・育成担当者の存在は非常に大きい。リーダー（会）のメンバーが変わらなくても事務局の交代によってリーダー（会）の活動が変わってしまうこともある。市町村事務局のリーダー（会）に対する考え方・理解度・関心度の違いがその原因と考えられる。

リーダーとともに活動をしてくれる人、あるいはその活動をサポートしてくれる人は、スポーツ少年団とりわけリーダーをよく知っている人が望ましい。市町村リーダー（会）にとって市町村スポーツ少年団本部への窓口は「事務局」が担当することが多い。しかし、事務局が市町村教育委員会などにある場合には、ある年月が過ぎるとその担当者も交代してしまうことが多い。過去にも事務局の交代によってリーダー会の活動が衰退していった市町村もあった。市町村においてもリーダー育成担当者にリーダー（会）活動に理解・関心のある人物を選び、その人を本部との窓口にするなどの対応が迫られる。一生懸命活動に取り組んでいるリーダーがづらい思いをしないような環境づくりが必要である。

5 「リーダーから指導者へ」

リーダー経験者が指導者として活動を続けていないことに関して、現役リーダーの意見を聞いたところ、「指導者になる気はある」「リーダーの経験が指導者になって生かされるはず」という声があった反面、「指導者が何をやっているのかどのような組織になっているのかわからない」という指導者とリーダーの「距離」の遠さを指摘する意見も出た。

「指導者が何をやっているのか組織がどうなっているのかわからない」というのは日頃からの指導者とのつながりが薄いことに原因があるのではないかと「リーダーから指導者へ」を考えるのならもっともっと指導者の中へ入っていく必要がある。そしてそのことがリーダー活動を生かすことリーダー会活動を充実させることにもつながるはずである。

県リーダー会のメンバーと話をした。現在のリーダー会にはさまざまな課題がある。そのような中で最も強く感じたことが「基本・根本に帰る」ことではないかと思う。『リーダーとはどういう存在なのか』『リーダー会とはどのような目的で設立されたものなのか』を活動しているリーダーたちがもう一度しっかりと考えていく必要があるように思う。また、リーダーの周りにはいる指導者もリーダーが活動しやすい環境を整えていく必要があるとともに、設立されて20年以上経過する県リーダー会の活動をもっと多くの指導者に知ってもらう必要性も強く感じた懇談会であった。

埼玉県ジュニアリーダースクール受講生へのアンケートの分析

1 はじめに

アンケートに関しては以前よりとっていたが、現在のような形で前期後期の質問内容に関連をもたせ受講生の変容を見るようになってから3年が過ぎた。前期の質問では①参加の動機、②ジュニアリーダースクールへの期待、③スポーツ少年団に関する理解、④活動状況を、後期の質問では前期の①～④を受けその変容をつかむ質問を行いスクーリングに生かす目的で実施した。

2 参加動機

受講生たちの参加動機を見てみると例年「自分から進んで」より「所属団の指導者に言われて」参加しているケースが多い。また、「リーダーに言われて」参加する受講生も少なくなく、中学生団員への直接の声掛けが、ジュニアリーダースクール参加への重要なきっかけとなっていることがわかる。ジュニアリーダーを増やすには、今以上にリーダースクール開催についての案内を各「単位団指導者」へ知らせる手立てを考えていかなければならない。

アンケートの結果とは別に参加者を市町村ごとに見てみると、ここ数年ジュニアリーダースクールへの参加市町村が固定化されている現状もある。ジュニアリーダーのいる（登録された）単位団を増やし、より活発な単位団の運営を促す意味でも、ジュニアリーダースクール開催の周知徹底はもちろん、リーダー活動および県リーダー会のPR活動も行っていかなければならない。

3 スクーリングの内容について

若干の不安を持ちながら参加したジュニアリーダースクールも最終日には「参加してよかった」という感想を残しスクーリングを修了している。スクーリングの内容にも満足しており、それまでよく知らなかった「スポーツ少年団」や「リーダー」についての理解を深めるとともに、講義だけでなく「オリエンテーリング」や「アイススケート（平成13年度よりスケート場閉鎖のため実施できず）」などの野外活動、そして何より本県ジュニアリーダースクールの特色である「班活動」「係活動」のグループワークからさまざまなことを学び体験していることが読み取れる。

受講生にとってとても印象に残った活動である「班活動」「係活動」を支えるのがジュニアリーダースクールのスタッフである「リーダー」たちである。彼らは前後期6日間を通して1つの係1つの班を担当し、そこに集まった受講生を時には力強く引っ張り厳しい態度で接することもあるが、最後には受講生の陰に隠れ、受講生だけの力で運営できるようにするのである。難しい役割ではあるが、このジュニアリーダースクールにとって「リーダー」たちは重要な存在であり、彼らたちもまたこのスクーリングで大きく成長しているのである。

4 受講生の変容

リーダースクールを修了した受講生は確実に変化を遂げている。講義を通して「スポーツ少年団」とは何か、どのような活動が望ましいのかを知り、「リーダー」としての自分の役割について理解したのはもちろんのこと、そのことを基盤に6日間一緒に過ごしたリーダーたちの姿を見て『自分もあんなリーダーになりたい』という気持ちが芽生えている。それはアンケートの「単位団への参加回数の増加」「リーダーとしての自覚」「今後の活動継続の意思」からもわかる。ただ残念ながら「指導者になる」という考えは意外に少ない。ジュニアリーダースクールでリーダーとしての意識が高められる中、今後は「指導者までの継続」が課題となってくる。

受講生の多くは中学校1年生である。今、「リーダー」について学んだばかりの受講生に「指導者」まで意識させるのは非常に難しい。「指導者」への意識は今後リーダー活動を続けていく中で生まれてくればそれでよいのではないだろうか。ただ、リーダーが指導者へなっていくことが望ましいのであり、そのような意識を持つ第一歩としてのジュニアリーダースクールの役割も大きいといえる。

参加者の多くが中学校1年生であることを考えると、県リーダー会に参加するまでに2年ほどの空白期間がある。スクーリング修了時に高まっている「リーダーとしてがんばろう。県のリーダー会に入ってみよう」という意識も2年経てばどの程度のものになっているのか疑問である。逆に言えばその空白の期間のどのように気持ちを持続させ、高校生になった時に県リーダー会の仲間入りをさせていくことができるかが今後の課題として残る。